



特別  
5  
6039  
3



28

29

3

4

56-4069

八五  
6037  
3



狗摛集卷才七

春

正へて天下れ春のふらふ  
 空ふ神よ一花ひらら梅をふりて 貞徳  
 一まひらうらふふらふら  
 正月のふらふら春のふらふら  
 梅のふらふら也 桂堂  
 天のふらふら梅の花  
 吟のふらふら也 聖のふらふら  
 鶯のふらふら也 梅のふらふら  
 鶯のふらふら也 梅のふらふら

重頼



横山重



蛇乃巢ハシテ多ク世ニ門  
龍身取アキテヨリ約ニヨリ  
龍穴ニヤ小舎カカレテ  
壁乃多紙の紙ナリヤ  
雲井ニキキテ  
花山カ枯の蛇乃鳴ク  
あかひ  
三千年も及ビ  
源左  
夜刻と秋  
貞徳

と  
約  
寒霜  
海  
目  
花  
貞徳



力結ろんくみ疎とん  
胡蝶飛垣ふとんのひつらち徳え

首よふせは日新りけい支  
梅ねくう二月に章を思ひまれ 貞徳

當ら妙法を結ひとん徳とん  
雪り結り并とる廿八日ん

赤いとう一つ方梅の木枝  
雪回とうちあつてあいとん里一

商人の似おりぬ物段を止せ  
まぬまくまの徳とんあらうん 葦友

くらからあくく一日思ひまれ日  
やー一日一つ夜のあい

長用のあらひてうら田子浦里一  
こらあら一つ徳とんの袖

春あらうのあらひとん日  
からあら一つ徳とんの袖

あら一つ徳とんの袖  
あら一つ徳とんの袖

汁鍋人味等をあらひの徳とん  
あら一つ徳とんの袖

あら一つ徳とんの袖  
あら一つ徳とんの袖

御尊持し毎日乃 性 親重

ま白丸里にゆりこころあま

ゆき志ぢんが紫のまわ少袖 徳え

夜く人乃まをほちちち

わやつあ山の子蕨たまひり 曰

鬼結らひつてあ化しうま

あ物乃つちちやまああるん

あのちまふ袖婆のむあふ

春の天子もまをやあうりあ 友友

あをれあうあうあうあう

配りー乃ちまそ 桂帝也 貞徳

えん及大史の年乃ちま

あひもあーくうらまら一の台

まへてあまあまのあ

甲利うらあゆあ 燕山人 甲 一

むつとま今を盛て見し

蛙甲しああ山あああひ 親重

あまあまあまあま

ほろそらふそられあひのあま 我重

あまあまあまあま



爰引一決りすれぬ海成と一正  
 七重いまは庭いふ成りなり  
 月去り望りし年又去の秋  
 為友  
 幸くあらうき桂さうり  
 谷川へ油をりし春のさ  
 龍巻の火のしりかき也  
 龍の以月の秋教書成催と  
 五乳  
 壬戌去る心平やあんと  
 お座敷の三月盡と志引り  
 也

狗摺集卷之八

夜

きりし世帯を切巻れ  
 鳴りし文衣の法の部  
 村ぬ少事なりたなき  
 子規鳴りしに基成り  
 下ししれ口小舟少  
 一二月の名茶又月結  
 舞乃あはぬ河少  
 清水りしやう少  
 貞徳

檀の浦あそび乱と祈  
フのツも小神よ書結部らん  
お取あられ頭鼓を打くま支  
すれうからい速やむむらん  
あそびみく物早よらん  
虫乃はく舞やあけの巻まわ  
尻のりりあそびもまわらん  
堂火取結まそまそま学文者  
らんらんらんらんらんらん  
昔一やのまも数ませらん

やこもらんれあらん  
さし女に本もあははまそらん  
ひし結人のまそらん  
橋乃このほこ方小袖まそ  
蛇をまねぬ人あそらん  
実取れらんあそらん  
あそらん人乃あそらん  
物あそらんあそらん  
あそらんあそらん  
あそらんあそらん  
あそらんあそらん  
あそらんあそらん

牡丹山く比尺も振舞子

牡丹山く比尺も振舞子 友友

言りし事よもあはれ

ひきよとのろく相よれまゝ 貞徳

み奈川原乃真冬も

夕顔や山くふくは 貞徳

梅のとりし事いふ大

葛蒲もいふ事いふ 貞徳

あまに袋れ救やう

そりお存子乃むも 貞徳

み奈あつふ事あ

夕顔乃地子よふく

鬼もいふ事あ

そりや 貞徳

瓦子乃塔のま

花もいふ事あ

あつやもいふ事

清水ひきよく 貞徳

音もいふ事あ

富士乃山廟ふり

穉人のまき舟の底に群集す  
乃即ん此紙の安士まきり  
功をよ神ふまぬの物  
汗をぬくへの海をあふさ  
物物を只一まきり布衣  
まきり穉人のまきりまきり  
まきりあふさまきり物のまきり  
山をよまぬのまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり

長刀物まきりまきりまきり  
暑氣やじ人のまきりまきり  
鳴食刀のまきりまきり  
焼公乃まきりまきりまきり  
涼くまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり  
まきりまきりまきりまきり

狗摺集卷才九

妹

目小見ぬ事をもつて母とく  
 此はくると林乃志事し風の色  
 大井丸里にむ付ふり  
 卯とて極し山々の女御都  
 延一時乃山よりうす乳  
 物影の目影まの月れ客をさ  
 是や入日紙まの舞れと  
 西山乃尾安の山より舞鶴

くら見いさる里能川有  
 落鮎を双六うらよまひせ  
 末世の毒悪の毒流ん  
 麻を題くくみ一平人  
 是もたよりくある中風  
 かに至一うくや毒を林の毒  
 毒もらつ事しゆうこの袖  
 暮るく少鷄合や見てぬらん  
 故に柘榴乃実然あむ人  
 月りらむかまのうらまはる人  
 重彩

力にうそくあらん文能の  
 きく見成猫うあうす月り  
 貧乏のくもくを能毒の毒  
 月の文法乃秋毒物うそ  
 立てて見居く見泊の毒  
 十七夜十一秋とて月二生く  
 伊豫も讚波之立梅の毒  
 羞捨身能毒見く多月れと  
 夕りしむいみる物の形ん  
 幸山の月うら東鏡を流日

うつくしと秋の鳥の聲のきき  
池鯉鮒のさけ月うさるも  
山田と鹿乃番紙とる此  
信也も弓もあはたのまじし  
アヒとる人の袖乃雄風  
月このやうな夜ふあは建と  
秋のさけんらたのまじし  
書しは月よまきあはたさるも  
海鳥の鳴る声と長文書す  
月紙多しうにさる謎のさ  
宗二

目くさ山月と道乃りてお  
華のうさりやさるよひま  
枝りし梅と物うゆり言  
月うさあさの坂とさる  
露さる谷人さるふあ  
うさる川り物とさる  
二味線と月よひんねの  
紙まねふ道僧うつら  
あさ梅乃風やしくさ  
月の入さる二味線とさる  
宗二

あつちのやうな人  
首のつらさもさうな生れ  
おれも羊に殺もすくや又曰  
印もや露のふくまは徳也曰  
家成おてもさうなくいん  
義忠、古木の枝よりそそ  
事代無事や子建果多持  
鳴虫成多記之る世にありて  
言ふ火より里に若も  
指ふく虫と何れも道も遠ん  
親直

世をさへいさしく悔風うさく  
露霜もらんらんまんと書  
人風少りし月とあひせぬ  
猿猴や木実よりとひりて  
公平く山心二十里乃林  
野分してりをさく虎の  
はくもいさし神の海  
二夜友成益乃地  
藤乃少くともあはれぬと西の丸曰



油のりもあつて圓のりもあつて  
からまじりな刀をともて申のりせ  
踏やうちうちる番れせうに  
永移よま庭の落乃古荒雜 親重  
寝物うちに月婦しゆ家  
肌を也秋よあつたの國山いひ 徳元  
月いらちちと舞ようりふ  
物やれれまも長門の穉まを 親重  
筋のりうくこつ戸商人  
何し能申てらあつたういふ日

あまれふもつて名月成りか  
ふふらや海流ひくく印するん 長友  
うすうすも只まぬをまぬ道  
富士の太鼓も珠家あつた長 長吉  
出きあつた物あつた  
露印もまぬまぬ換露を 長友  
月見らうふおのまぬ漸  
空響れらうあ本戸いへん 一心  
月あつてひくくを帯ひやち  
秋長つた見れ伊勢物うち 長友

物あつらへりて母波地乃秋道し  
いひ見ほもつて粟の大きき  
おちりしる益乃教  
柚の実よりむふしる白ひれ  
握りし能の仕舞乃之粟  
作らうあよは秋のまき  
たふくしき梶乃粟のあ  
ひや表て疎さあひえらるた  
一こたあぬ果報あり  
あふん乃ほしきしきしき  
あ

こころめりた果つしな  
極し子首乃あまのそり  
竹の筒もななくに  
雄風いたるあはれ  
余あよこあやて裁  
大上乃麻の山し  
夏かこあや  
桔梗もや粟の  
本ら糞持乃  
秋風よ目白れ  
ま

つふふふも今もあつちん  
幸年極し垣の材を極輝て 貞徳  
をゆへやうと出れうゆふ  
新き家へはあぬきうくあ日

狗猫集卷第十

冬

力れ事ささるうそくそん  
りももつて心念乃神世存  
即そ布れせんうそり残る座  
守方の神乃さ方の山むすうと  
首ふ人の頭中とゆは  
あふ事や只心盡かそ乃そ  
やゆのほろも山ふ針  
衣成ぬそそと無念のう

徳元  
貞徳

蘇ハニヤ霜ふるる里枯渚也里一  
 浮つれく人志は海より進ん  
 季物りあるところ川の鴨 貞徳  
 加賀の鴨もあう中 傳めり  
 水鳥尻毛や月よ少るあ流ん 夢友  
 くるあつくところ心さうりえ  
 ありて射ていふらうふ夫ひあ 津え  
 山うらも志なき池の中 鶴  
 鷺鴨の羽風や海へくも常 宗及  
 海士人やういあれ 赤頭

浮漂るれ乃鴨成とくくく 主新  
 人っふうも志くれうあうら  
 鴨も成と志母い志なき果  
 津前よ基とす人あうら  
 くるれ鴨も人よあ進物よ 貞徳  
 古も友もまきくうくさう  
 川人よまきけぬ日本れ鴨うら 幸新  
 鴨も成と志なき海より進ん  
 何とて人乃くくまあうら

然るに朕も世の物ならず  
 うらやみ治茶の心業は  
 あらゆるもの細儀を自ら  
 かに見たりしに白ん也  
 ひよりにまをて物も  
 板屋のゆれをれ  
 小の金もまけり  
 冬もて夜子ののこ  
 かしひも  
 けり

紫の茶はつりたる  
 茶もよ  
 梢もさうら  
 うらやみ  
 炭薪年貢  
 けり  
 身もま  
 けり

あゝあ紙子もとてあ我妻の 夢

涙をば居目もよふ印はん

格乃山交に見世心物落 貞徳

しる人のまゝあはまは年敷

くそくらや首分乃大臣 親王

秋舟にのらひや西宮ん

落命ふらひりす酒吞 主彩

西女男ころああこころ

哀多よころまきりや 貞徳

鱈のわらまん

哀多よあゝあ思ふは成るや日

神をばせんあゝあ

年七十二月晦日にあ

狗獠集卷第十一

虫

浮舟うんん成かろらん

白雲れやまを流るまゝかき連

物々事十八のうゑ

五礼子書とくふ字成あろく 地友

果報あるもや糸玉れり

姦女くう氏の無きまもはは也 主形

千萬年と繋る志しけん

毒能物く見のうろ病と飛

何のくも車に撮ふまひ也  
百来も同一人まら孫せん 夢友  
掃子あふ車に中ん丸好も世  
玉子れあやうさくまぬく 貞徳  
忍ふありらるるかききあぬ  
車に撮ふまひ也のりや日  
ひま狼や又ま狸の  
去白に字ふ女乃高楊枝日  
秋の夕に秋の志んききよ  
とよとふとあさぬ文に露泪日

尾もあふふ袖に物違ふ  
衣に秋の夕乃川とあ一正  
あか乃あ秋あうあ秋あまら  
去妻ああも道うああ志んき  
ゆぬの寺よああうああ  
うらあひる人ああひるああ  
似合あ中と秋とあ  
こひあ同一年ああ男して  
ああともああああ  
あああああああああ



無紙もそのの字士は山  
多所は志介鹿よ公西よりして  
鹿よとくひつ支思ひを山ん  
耳くも鹿の乱とまはれん  
く来り神つるまは月とせん  
りてその鏡よとら成つて山  
月とあひ志介と思ふよせん  
よぬ結小使あつて測もれ  
山りもあつて口もすまは  
我若の鼻はあつてあまは

うも、西のあまは  
泪中と現るもは目よあせ  
口と物も交くに  
くよあつ男結もは成のれあ  
はつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつて  
唐船の帰現をうけと様浦姫  
六十にあつてあつてあつて  
高船もあつてあつてあつて

主彩  
草友

八幡とてふ人も人の旅を  
 男やとてふ物も人の旅を  
 柳の影も人も人の世中  
 りの文を花も付くことごとく  
 やせ申さるる公の心も  
 了る紙の登る紙の登る  
 之尺もさるるあはれも  
 手拭をたけつあはれも  
 夕あとも今も  
 小室相の局の終るも

長口や舞のこゝろ  
 静のまいてころも  
 巴を波のもてころも  
 女房をつまてころも  
 大層やころも  
 帯のころも  
 花を立次方とたころも  
 座の目もころも  
 無事とてころも  
 沖を流川とてころも

無庫ねのよ京中先平連  
 けをよつた若原ね髪乃より  
 なる介併乃よれり部支  
 清益世よと建てるる多好  
 親重  
 海乃川りし海乃くん  
 舟橋をよつた親のきり別  
 正也  
 海をよつた少袖ららや  
 ほうきひらるるあふ山り  
 夢友  
 ままひらりる草ね葉の露  
 夢友結楊枝をよつた口乃中一  
 日

物の下りあきとあくまあ  
 瑞名してらり川と二子や生か  
 貞徳  
 煩惱をよつた福元をよつた  
 白帯れ少きひくもよまひ  
 重頼  
 何らけりあやまひあくと  
 帯をよつた重ららまらあ  
 日  
 うらららら世名おあひあ  
 あうらら人うららんと定むあ  
 日  
 つららあ力れあうらら  
 日  
 河うららあららあららあ  
 日

折語の灯をよみ  
虞氏の海やなえのゆらん  
鬼角下ふふのうらみ人  
半信の結うらみひらうらみ  
継印のひらうらみ  
と結つとふ紙長刀のひら  
先づ折の折をく  
聲もあらん次方れ一  
うす情のうらみ  
星能あをに一枚福う  
徳え

口紙ひらうらみ正月  
暦の折をく  
天狗も  
矢れ妙  
双六の  
后や物紙  
くさうら  
あにさ  
あも妙  
道に  
徳え

やまの秋は山々を染めて人ほ  
ゆふと人まわぶつた果てする  
徳え  
露ふらうらうら果は綿衣  
細布れひそくに早よせんも  
あふらぬ蚊成代何處ぞせん  
馬乃あくと起らるる女  
今夕川の誓ちと世ふも森は  
骨力にけりてにけり後書  
月々又屏風乃内へまの心入  
いと勝りてをるらるる文  
皇一

とまきんとらうらうら中  
思ふうらうらまを及んれ日  
砂成ちうらやうら支  
小町も花見の山もま  
むらうらうら侍  
翠入の夕夕まぬ賀成里  
道也合我まぬ守らん  
うらうらうらうら  
五乳より結きてうらうら  
山うらうら  
良徳

口もひまゝの心小見大らこ 心信  
 丁もわし産乃紐をき後  
 見ても面白く白紙まゝの 貞徳  
 意より見るとしてまじたる事  
 物事よりふまひあやまぬらん 乃威  
 新巻や古巻も又字の目  
 小町に習ふ乃事又又談  
 子あはれおの神といひも  
 見らぬ親事堂にまゝらん 主税  
 二ふもかくいふまゝあらん

若成結しや成りやう却るれ 高二  
 泪乃神を山くら浪こす  
 形とれ末の松山行ひ少  
 一の少結よまのこる幣串  
 祈禱もまゝら茶も春ぬらん 貞徳  
 海くらのそくもまじりて  
 美取乃足成りてふ山へ入る  
 玄山へ入る事もまゝ又使  
 禿やまゝらうらまのり 親ま  
 山へ入る禪念家内事

能子れびし草よ相云  
都もまたせ川ゆかあはし  
あけしちたそ園子く中  
袖ひよ月よ川ひんの髪  
あひら印くさく枕し  
汗くくたそあ辰の園  
うそあ顔ときき袖ひまきく日  
お子じらしくままはく月夜  
ほああく落も我とされく流 草友  
驚やうい氣つよあ人あて

別と行しと引くさうあひ  
うく又あまんかてる風あはゆ  
うれくさああ秋あはまん  
やすくまあやうたう子あまて 草友  
あはくまあくうすは中 日  
あまううくうくあうく  
あひにわがしうそ津乃山屋日  
うもまああ身は日向あ子あ計  
涙あらしきあうひまきよつあ日  
あけしうい汗のあまらさ

形見とてしるまきし一方を私  
多のまはるおむねはあひ  
若子かたあてて悪らふを  
琴今れ事ふ似る之味縁を以て  
二世の小徳乃子徳を以て  
枕山ししに公うら  
恋成きまてお娘をうら  
世は神よはる人く  
甲申中子うね文のうら  
しよらふあてお終ふ  
貞徳

懐妊乃おいよくとておし  
世とよ結ふらふお徳  
ろり成まひと詠ふは日  
里んて及悪の最なる  
とまひしおあてお終ふ日  
太刀の男麻の角鞘  
一和ふと人と我らの持り  
美乃盗人腹をた  
あまらる悪れお志起結  
我らと物おあてた  
貞徳



且もわが死も人の世も存 花友  
秘もさるる心建るる世に  
思ふ我れ人とも一異の國 主親  
あふし海にありては横笛  
その心ゆく候ふ是よりま男 月  
其の秋も大ら引くは玉  
志と念清しは福也れうら 花友  
まん丸なる血のこころ中あて 貞継  
たしあるこころに成る者とも  
鹿もも先ふあまの神の跡 花友

文殊堂あまの衣くは月 月  
是親も乃水利生のま  
ふれもたなまやうはあは 月  
下もあまの法系暦月ん  
と海くは大國まは婦入る 主親  
恋路なりくは舟路也る字 月  
海もあまの思ひをこころん 月  
あまの思ひをこころん 月  
志乃口まもやうを妙ひま 月  
敵もあまの思ひをこころん 月

うらやみぬくまよひのまじり  
ほろろぬかたけりもかたけり  
小町ウ平丁乃身想あやう支  
浦とあうりて肝うつろをり  
まぬくまよひのまじり  
ふしや神楽に思ひおとほん  
後家とこころいふら入うする  
由也  
貞徳

狗獺集卷才十二

神祇

ほろろかろろひ勢はる山  
猿樂乃おりこま具神子能  
山と幸やうてをてぬお入  
祇園とふりてと説中あうて  
鍋と釜との教乃多うさ  
水湯とてしとるや鏡上の神意  
柱乃教をいふとふ年  
鳥井と能の舞甚は見海で  
貞徳

山入のよ水海に奉りて  
奉引むまひまふ海神今あ  
針山くふ波を牛乃故  
天神や姉う少海とちる海  
住吉社取のあまひつら  
神よりとてく神れ書風  
若人乃持燈と丸世のあひ  
日吉乃まは神事よりあ  
救の車と川や山  
祇園寺と神絆乃論余まひ

あまのつらとてく神れ書風  
若人乃持燈と丸世のあひ  
日吉乃まは神事よりあ  
救の車と川や山  
祇園寺と神絆乃論余まひ  
あまのつらとてく神れ書風  
若人乃持燈と丸世のあひ  
日吉乃まは神事よりあ  
救の車と川や山  
祇園寺と神絆乃論余まひ

日本と墨本うもてをひか  
野乃と能島井うとて改く  
人丸の能と吉聖にあらぬ  
務乃之言能方撰と丸乃  
杖打能て身心神と  
くろくし目も白の座改坊親重  
おん金おひと出や可た  
神乃神界うくろくお湯と  
千けんもはは改めうあまき  
とろくの園乃神のてあたら  
主親

海土人も言れもも也能口  
磯山けり乃神若神後月  
星のひら能うろく天象  
まの能軒口うと業能と日  
乃くも白れま乃うあ  
ててく神うひふ多神と能  
神心神と神と能うは  
あちて能うはあもあ能  
妻は能子とあ能推も能  
能乃神と能のう風吹あて  
親重

高岩とていあらむ重々敷の  
かゝ社者あり聖後の山とて曰  
七代とてし連々所とて上  
天神とて座の内よりけり無て  
時血やじしもももももも  
初言流ふり美都の神とて身一正  
いししししししししししし  
山王とて文月とていしししし  
うんもももももももももも  
年毎の神とて能く記すしし  
曰

唐の世に主賢人の出合は  
毎りしりしりしりしりしり  
まの神とて一時も神とて  
うししししししししししし  
神とて火とてしししししし  
不思議の山とてししししし  
遠近の料理のししししし  
うししししししししししし  
自在のししししししししし  
天神の山とてしししししし

狗牯集卷第廿二

釋教 哀傷 述懷 常

了多起を及るるに如く

大に及身をも及るる南世の事 主新

救珠ともあれ多と汲桶

年少湯也や新橋坊主と云はん

二匹やうまきら上親善

車やとらふさうさ清水よ 貞徳

蓮乃糸引 法座のまつこ

ふそくの中お好もきら山ん 親善

子ハ親ノ愚成ナリト申シ  
尺也の清きや、わが心は  
月影も赤く、あはれ母の  
心は、あはれ母の心  
只、わが心は、あはれ母の心  
大佛の別、わが心は、あはれ母の心  
秋の秋、わが心は、あはれ母の心  
勢、わが心は、あはれ母の心  
小弓に、わが心は、あはれ母の心  
雪波の、わが心は、あはれ母の心  
徳元

悦と、わが心は、あはれ母の心  
教、わが心は、あはれ母の心  
諸道、わが心は、あはれ母の心  
物、わが心は、あはれ母の心  
地、わが心は、あはれ母の心  
錫杖、わが心は、あはれ母の心  
ま、わが心は、あはれ母の心  
親、わが心は、あはれ母の心  
只、わが心は、あはれ母の心  
山、わが心は、あはれ母の心

有るはつら海鹿やあつらん  
 人の心も甘あき坊と結院 貞徳  
 百のおあしをうしひくもれ  
 毗沙門の氣あま物候松を月  
 子少く結院人の執心  
 道成寺こも我まけり望あや月  
 文とくしく海をせり  
 結院の一向宗乃とくあき月  
 子在結院中にまじりあき人  
 らくらく結院のうらにあき月

千名親善も結院の秋  
 月望の初遊へあきけ鐘ゆえ  
 古具足つるの中いひて  
 掃地とせぬ佛檀の祈 夢友  
 予心母の月成るを里候  
 お見風りく山寺法多日  
 詩乃上の秋の本位まき心  
 もあつらんとまじり初遊海 望一  
 真も併ふあき月  
 長梅の上よあき梅とつらあき 貞徳



きつふもみ見才、五百人  
らんを力建人あせりけり  
天やひくをさよ乃一載  
まきも勤を入る鐘響せ  
神も後をつすも世中  
高見よ南世河を以て給  
娃乃ありし人子生集家  
三途川をのりてや福ら  
と竹也玉成おとまんを  
佛の目をもくくは末の世  
曰

唐に日本の子もゆ及ん  
きつとて早し初遊の觀者  
道修をなゆくと改く  
治らたし收後乃うとく  
し氣巻もたてあかくけり  
毛自舞也茲懸万の麻聖園  
鼻能穴之やふふふ  
本佛と刀建ハ初基は能て  
焼物乃代も言ちやふふ  
ううこれ寺の風呂の志り  
宗及

観音は前ふ花山一は神て  
日も長教理をよむ毒解山 皇一  
流乃水ぬりし也くふふぬらん 日  
歌と申すは具是あひれ  
此法のもちあつたまき也く言天王 親重  
きく一は是のふ高宗乃札  
蜀山く宿能取ふて是  
仙人乃姿ふ似てるもらひまき 皇一  
さめかかても是て海うらん  
田舎くは流うもくあるは教書

山伏もあつら廬山は海の家  
是蘭有乃毒のくは建う 高友  
見るとは程あはれなりと云ん  
去言もきくまんこも山く 日  
千本れあはれとあふ読むく  
卒劫婆あつたまきも薩入る  
人丁うつとく道池のたあ  
高くは法中をうけぬ世報  
大幸の香梅のまき  
仏檀乃あはれもくもくもく 皇一

まことおののきくぬれらるひの  
怒る能くうんは解ありとて  
又ゆる山を乃く人につのゆ  
まのゆきもあはぬ大酒  
ひんかへ鎌田無きうの法よく  
ゆきとてさる時うもさる  
ゆるゆる火を生みれらる  
亦能中ててもきん海も  
死骸と及ぶる水のあはれら  
閻魔乃かたら辣干印ん

とせうたら率部遊法成るあ七日 親ま  
無のなるくしあせはる人  
ぬりまの海能くうひあはれ  
うもさるしあは法師也  
無きふ能あひうる不思成る  
海能くふゆるひ有るあは  
ゆもあはる祖師地獄へ落ぬる  
利剣ひりさるゆ海やあは  
煩惱のほく起きあはれりて  
目くらけの大佛教ふらる

此くれけいこ志つる重徳  
 紙子の袖も露よおきささ  
 糸をつとみ紙を向るは老  
 柳楊も併りやたす  
 西のも整りとも同し重徳  
 あらびつりや極法のうさ  
 同答ハ在る居たれさひあて  
 たそゆと合致りて引入て  
 座禪の僧うらふかき大臣月  
 美笠山うらふ僧やあねよ

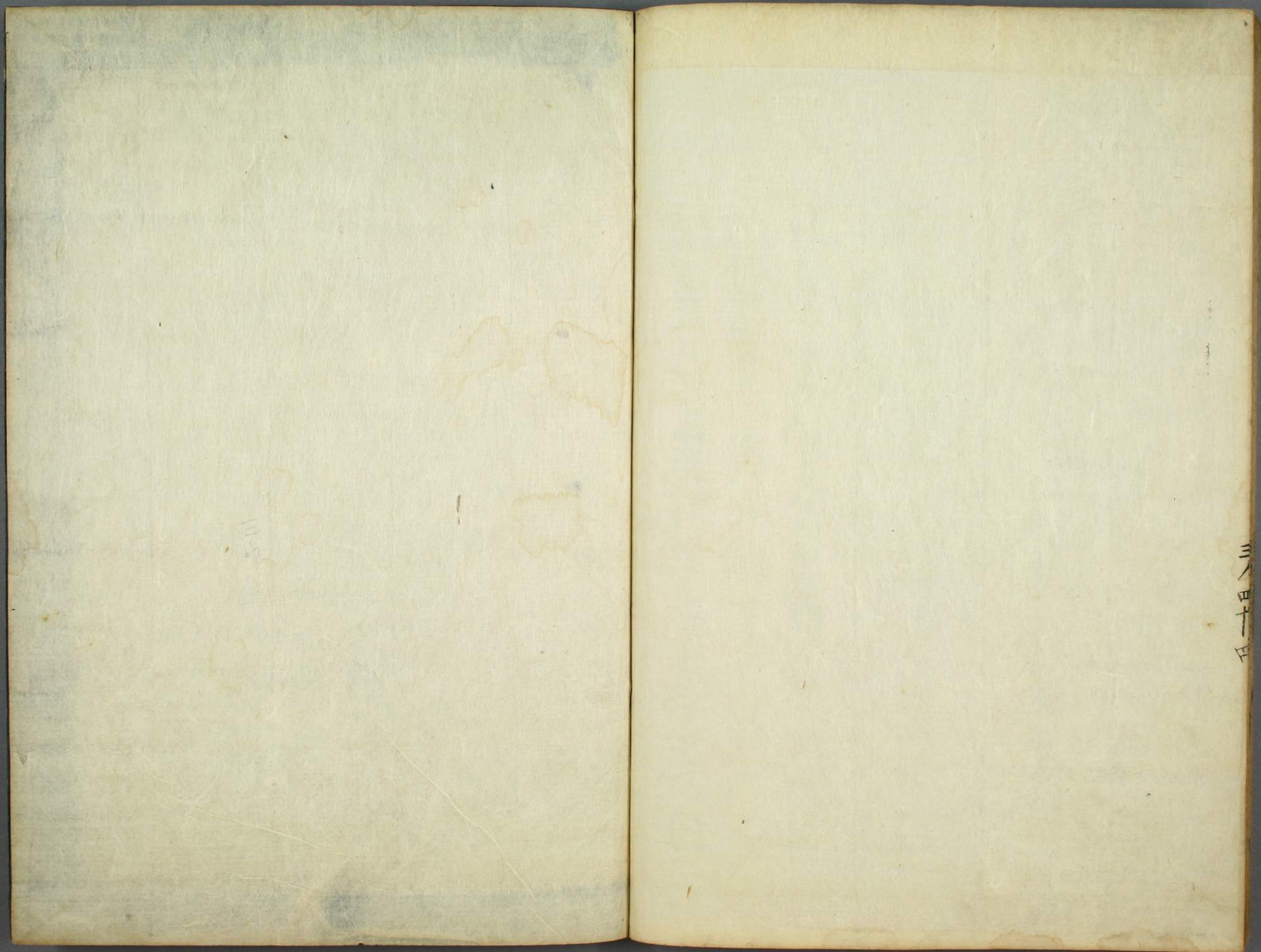
今下僧と高野聖とつらひ  
 月もあもたつてえん  
 大師を及公長閑にあらわき  
 門徒坊主れ一のいぬさ  
 月の秋よ今下無帯れ頭巾き  
 後とつとあねまき情あき  
 江口に宿紙りりし修め老  
 一首紙あそとらるし山陰  
 世紙う治と知らるる撰法師道  
 日  
 世紙やまひもあねとあね

武人の法くつゝ物鳩乃杖曰  
交く尸主生れ会併  
忠尖今い身乃うゝ毎辰早あ正日  
ともあひやせんは佛蓮  
法隆寺師小まふ下女事修  
多辰のちつたをくさくさ  
母親乃うろんれ小袖やろひ  
露のうゝ世よ執公も好  
一節ふ妙よ洋去れむ乃玉歩  
五月ぬれまやけははらう松

於一あり子辰ひろよ法然  
初禱しととと水のうらわら  
疎捕るゝ二月堂れ牛玉にせ 親重  
二京の西しつと船ありひ  
ひろまもや言田門徒の法家ん日  
中及び太子母う只あぬ  
からんに法の具ぬる天王寺日  
即しひよ斬す知初抄書  
至交承小宿る信を建院と 貞徳  
守月川まゝれ山らよる

自然居士初母欲之也其山  
神とてありて併とあり  
物と欲と法法と其日法作書と  
一とて叫ぶる如實とあり  
はくくくくくくくくくくくく  
此の也也也也也也也也也也  
くくくくくくくくくくくく  
女くくくくくくくくくくく  
煩惱も言絶とありとく法と曰  
春秋乃其後とありと海と曰

彼處とて此の法先本意と曰  
お寺の内と楠とありとあり  
たらしむるくくくくくくくく  
見たりとありと一切の事  
経教と法とありと法とありと曰



三八四十一

